

教導すとは式部白腕の進歩未來多望です、今より教育家志望の心得、中々用意周到です。次に御紹介致しますのは撰科の方の頭に毎日ツンツンと絶へず鼻を鳴して模寫の熱病家、余等にしては去つた後に、鹽の一俵も振りたい位の模寫熱病、空閑〔陽樹〕君です。此れは九州から遙々慈しき兩親兄弟に別れて、美術學校迄來たとは實に感服の外なしだ、又模寫の御熱心には、滿腔の同情を表してよい、其れで筆と紙は手より離れたことがないので、是を一年の四天王の一人廣目天と申します、撰科の隅の方に如何にも壯嚴らしく目を細め、バチバチして立つて居ります、六角〔勘次〕君も傍で只今芳崖の不動を模寫して、中々能く寫して居りますが此廣目天の御利益が十二分半きいたからと思ひます、此神は毎朝第一早く例の御座に御臨座しまして、紙と筆を一度手にしたら最早歸る迄は、決して休むことなく、模寫する許りです。重に狩野尊神の様で常備品は最早大底寫し切つた様です、此割で四ヶ年本校でやつたなら、宋明の御府の寶畫より多くなりましやう、九州迄只人一人行くに十五圓の費用と聞く、況んや此大神が汽車の箱五十輛に乗せて四ヶ年の後歸るとは費用推計られます、此大勉強神の御面相を申しますと、頭を後から見ると、圓で田舎の味噌玉の様ですが、前から見ると眉毛はピンとして、ぶたの様で、鼻はつんとして、延びた故か、其高きことロスキーの様です、御髯の生ひ具合は、八字の如く、ピンとして公家様風と見えます、頬は元祿美人を欺く様です、口は何時でもしまりなくあいて居る所は、確にぼた餅が棚から落ちるのを待つて居るらしい、齒は白雪の如く氷の如しだ、腰の邊に愛嬌がある様に見える、中々の善い子ですが、あな可愛相には美術家と生れたるが

不幸、美術家として免れ難い、いやな相が十五分コンマ二三程何となく含んでおる、然れど神よ怒り給ふな當世の大家と言はるゝ人も顔は悪い人もあるアーメン、此神は入校以來、誰の畫でも善き畫なりと稱美した事ないさうです、凡て博物館にある、應舉の山水屏風に就て、寺崎〔広業〕先生の眼前にて、先生あれはサッパリなつて居りませんねと申されました、又芳崖さんの不動もめちやめちやにやられた方だ、随分御大膽におわします、果して應舉芳崖の作を不出來と見給はゞ、神よ今後如何なるものを畫き出すか、餘等に何卒畫いて見せ給へ、アーメン

関連事項

① 恤兵展覽會

日露戦争に際して日本画科と西洋画科は恤兵献金のための展覽會を開き、収益を陸軍恤兵部に献金した。

日本画科の展覽會については『美術新報』第三卷第三号(明治三十七年四月二十日)に次の記事が掲載されている。

○美術學校繪畫展覽會 東京美術學校日本畫科生の催しにかゝる恤兵獻金繪畫展覽會は、去十五日十六日十七日の三日間、同校内〔校友俱樂部〕校友俱樂部に於て開會されしが、川端玉章、荒木寛畝、寺崎廣業の諸教授を始め學生の新作出陳せられ、見る可きもの多く盛會なりし。猶同會には參考室を設け、故芳崖の山水と不動明王、橋本雅邦氏の月夜山水其他玉章、廣業、觀山、春草、軀音、武山、神來等諸氏の舊作を陳列し〔マコ〕れり。

なお、『東京美術学校校友会月報』第二卷第七号の「はがきだより」の欄には

○先達日本畫で開いた恤兵展覽會では、繪はがきの店は、いつでも黒山の様に人が集つて大繁昌の様子であつたのは餘所の見る目もうれしかつたヨ（見聞小僧）

とあり、折りからの繪葉書ブームの一端が窺われる。

西洋画科はその二ヶ月後に上野公園旧五号館で開催した。『美術新報』第三卷第六号（明治三十七年六月一日）はこれを次のように報じている。

○恤兵繪畫展覽會 東京美術學校西洋畫科生の催しにかゝる恤兵展覽會は、去一日より七日迄一週間の豫定にて、上野公園五號館南部に於て開會せり。出品は意外に多大となり、總數三百八十餘點、内生徒出品三百點、此他新に生徒の揮毫せし繪端書あり、新作品共に即賣をなし、その收益及び特別の上り高を併せて恤兵費に獻納す可しといふ、猶都合によりては數日延期す可しとのことにて、成績大に宜しといふ。生徒の作にかゝる出品の外、重なる出品左の如し。

職員部

黒田清輝氏『初めての寫生』より、第一年、第二年、第三年等
年次を追ひし修作及び今日の作品に至る。二十五六點の大小作品の陳列

久米桂一郎氏 風景其他凡て九點

岡田三郎助氏 婦人肖像、老人等六點

和田 英作氏 こだま等

藤島 武二氏 風景二點

小林 萬吾氏 油繪水彩六點

參考品（美術學校藏）

松岡 壽氏 婦人

淺井 忠氏 收穫

原田直二郎氏 肖像二點

高橋 由一氏 鮭

ホンタ子ジ一氏 風景二點

ウキツツマン氏 風景

コ ラ ン 氏 畫稿五點

これによると西洋画科も繪葉書を出品したことがわかる。なお、こちらの場合は珍しく几張面に展覽會日誌を作成し、『東京美術学校校友会月報』第二卷第九号に次のように掲載している。

○西洋畫科恤兵展覽會記事

今や日露平和破れて、干戈滿洲の野に相交はる此時に當り、吾西洋畫科諸同人相諮り、茲に恤兵展覽會を開催し、資を集めて以て聊か出征同胞の勞を慰せんと欲し、正木校長を會頭に戴き、黒田「清輝」、岡田「三郎助」、中村「勝治郎」諸先生の盡力を以て、六月一日より十二日迄上野公園五號館に於て第一次展覽會を開會

す、記事左の如し。

五月三十日 開場、準備に忙はしくプランを劃し、出品物を搬入す、宿直丸野〔豊〕野田〔昇平〕兩氏

三十一日 學校より借用品左の通

椅子十 生徒用腰掛五 圓椅子二十 テーブル大小各一 テー

ブル掛一 生徒用食卓二 土瓶大小各二 柄子一 茶碗二十

手桶一 大藥罐一 煙草盆五 盆六 バケツト二

準備に忙はしく八時頃迄夜業す。岡田先生より菓子一折惠投、一同の勞を慰せらる。宿直丸野山下兼〔兼秀〕兩氏。

六月一日 午前六時頃より、昨日の餘事をなす。橋口〔清・五葉〕

氏表口裝飾に、丸野氏廣告揮毫に盡力す。學校よりデーブル二、

布片一、角椅子十を借用、黒田先生より菓子鉢三、中村先生より

同一、脇坂〔安之〕氏より手提金庫を借用す。

正午頃漸く開會、入場券百一枚、特別券即賣十枚、下足料壹圓參拾參錢、山下新〔新太郎〕、兒島〔虎次郎〕兩氏の油繪板賣約濟となる。此日入金高九拾四圓なり。

黒田先生より菓子一折を惠投、委員一同を慰勞せらる、宿直丸野薄〔拙太郎〕兩氏。黒田、岡田、和田〔英作〕、藤島〔武二〕、長原〔孝太郎〕、中村諸先生來會せらる。

二日 藤島、長原、中村先生來らる、開會延期の件を中村先生に依頼す。此日特別券百九枚、普通券百二十枚、下足料壹圓七拾六錢五厘、西〔三雄〕櫛田〔利雄〕兩氏の油繪板賣約濟となる。繪葉書賣高九圓貳錢餘なり、丸野氏氣分勝れず、會の爲め遂に倒る、野田氏に托して百五拾圓を銀行へ預く、下谷警察署より警部

來る、此日宿直薄辻〔永〕兩氏。

三日 八時前狂人場内に飛込み、大に亂暴を働く、遂に交番の査公に引渡す、ビスケット罐二、腰掛一を損害せられたり。ビスケットを食ふこと大約十數個。趣意書を作り、切符賣場に掲出す、全文如左。

吾曹日々自然の慰藉に浴して丹青の技に專なるを得るは、一方人生の慘事たる砲畑場裡に鮮血を濺いで、平和の爲めに戦ふ同胞あるが爲めなり。吾曹亦神洲の生民豈此苦境に立てるを袖手傍觀するものならん。然りと雖、吾曹筆を擲て、戒野のことに従ふは、其本分とする處に非ず茲に於てか我同人相諮つて斯會を開催し、廣く江湖の同情に訴へ、恤兵の資を集め、以て聊か出征の勞を慰せんとす。希くは諸士來りて、數時の清觀と共に、併せて恤兵の學に賛加せられん事を。

午前外國人新聞記者觀覽に來り繪葉書七圓餘を購求せり、午後會員全體の總代として、山下兼橋口兩氏丸野氏を訪問す、稍輕快に趣ける由。

特別券八十一、普通券三百六十一枚、畫葉書代拾八圓貳拾四錢、總入金高四拾七圓九拾九錢參厘、參拾圓を銀行に預金す、宿直山下兼川北〔元英〕江南〔武雄〕三氏。

四日 會計係金貳拾圓を銀行に預く、一昨日來會期延期の件に就き、國畫會員高橋大華、撰書獎勵會幹事山腰利道兩氏に交渉の事を中村先生に依頼一任したるが、本日先生の手を以て、博物館に延期願を差出し許可を得たり 同時に四日間延期の會場料金貳圓を納附す。

延期願

目下五號館南部に於テ開會致居候東京美術學校西洋畫科恤兵展覽會の儀來六月十二日迄延期仕候に付御許可相成度同月九日以後は國畫會展覽開設願濟の期間に付代表者連署を以て願上候也

六月四日

恤兵展覽會代表者 中村勝治郎

國畫會代表者 尾竹 竹坡

延期の事を警察署へ届出でたり。

延期届

目下上野公園五號館南部に於て開會中の恤兵展覽會來六月十四日迄延期致候に付此段御届申候

六月四日

恤兵展覽會代表者 中村勝治郎

下谷警察署長 殿

公園内立札廣告に延期の旨を添へ、尙斯會開催の旨と、特別券を送附したる新聞社に延期の事を通告す。

拜啓先般書面にて申進候通目下上野公園五號館に於て開設中の東京美術學校西洋畫科恤兵展覽會の儀來六月十二日迄延期可致候間乍御面倒此旨御紙上にて御紹介被下度願上候

恤兵展覽會 委員一同

各新聞社宛

昨日狂者亂入の損害賠償の件につき、下谷警察署へ行く、警部曰、此問題は既に刑法上のものに非ず、民法上の問題なり、賠償を望まば宜しく區裁判所に趣くべしと、一先ず歸る。損害賠償見積り

ビスケツト罐二個 三十八錢宛

腰掛修繕代

五十錢位

學校よりテーパー二椅子十五を借用す。

黒田先生來らる。岸畑〔久吉〕氏延期の件に付、數次高橋大華氏〔太〕方へ往復す、玆に其勞を謝す。此日特別券賣高十九枚、普通券二百三十九枚、下足料參圓參錢壹厘、繪葉書拾七圓拾七錢五厘、油繪八號小林鐘吉氏筆賣約濟となる。宿直薄拙太郎西三雄兩氏。

五日 青木繁氏へ葉書を以て出品物の賣品か非賣品なるか、及其價格等を問合す。平井〔武男〕氏親戚より特別室備の草花一籠寄贈さる。入場者特別券三百八十餘、普通券四百餘、下足料五圓六拾錢餘、繪葉書貳拾圓餘、丸野氏油繪二枚、兒島氏油繪一枚、龍田〔精三〕氏油繪一枚賣約濟。總收八百貳圓六拾九錢貳厘 宿直太田〔喜二郎〕薄兩氏。

六日 黒田先生より當日出席者一同へ菓子一折惠投せらる。淺草第一高等女學校職員生徒より、代表者教諭渥美銳太郎氏を以て、無料觀覽を乞ふ 承諾す。入場者特別券三十六枚、普通券二十三枚、下足料八拾錢五厘、繪葉書壹圓七拾貳錢五厘、宿直西薄兩氏。

七日 軍人觀覽者多し。山下新〔新太郎〕辻兩氏會員一同を代表して丸野氏の病狀を訪問す、入場者普通券八十一枚、特別券百五十四枚、下足料貳圓九錢、繪葉書九圓貳拾五錢、油繪岩鼻〔正修〕氏板賣約濟となる。夕刻閉場間際に來りたる觀覽者一組、榎本〔彦〕氏油繪を賣約す。豐多摩郡千駄ヶ谷村三百八十四番地徳川男爵家なり。宿直薄森田〔龜之輔〕兩氏。

八日 山本森之助氏へ、出品油繪海圖に就き賣約の可否及其代價

等問合せのため葉書を出す、過日來觀の第一高等女學校生徒有志より金貳圓寄附されたり。岡田先生來らる。入場者特別券六拾錢、普通券四圓貳拾五錢、下足料八拾八錢、繪葉書參圓九拾貳錢、總收入拾四圓六拾五錢、宿直佐藤〔勉〕久萬〔盛幸〕兩氏。九日 午前十時、市立忍岡小學校訓導永田奧作氏來り、高等科生徒の無料觀覽を乞ふ、許可の上男女生徒百二十名を入覽せしむ。大給〔近清〕氏より一同へ鹽煎餅一袋を送らせる。昨日金貳圓を寄送したる第一高等女學校有志者へ禮狀を出すべく督促されて出す。入場者特別券十九枚、普通券四圓貳拾錢、下足料八拾五錢五厘、繪葉書四圓七拾錢五厘、宿直松林〔千里〕川北兩氏。

十日 丸野氏全快出席。入場者普通券四圓貳拾五錢、繪葉書參圓參拾九錢、下足料八拾七錢、總收入九圓七拾壹錢なり。宿直野田久萬兩氏。

十一日 入場者特別券五枚、普通券七十三枚、下足料九拾貳錢五厘、繪葉書五圓四拾參錢なり。

明後十三日 會場取片附けの爲め、磯谷〔額縁店〕に書面を出す事を中村先生に依頼す。宿直薄兒島兩氏。

十二日 午後五時閉會 黒田先生より、一同に菓子一折を恵投せらる、入場者特別券百十五枚普通券百一枚、下足料壹圓八拾九錢五厘、繪葉書六圓九拾九錢、油繪拾圓なり。繪葉書出品者及油畫にて自己所有額縁に入れたるものは各自持歸れり。

十三日 委員一同會場取片附け、出品畫運搬に盡力せり。

以上記事の如く、黒田、岡田、中村、及其他諸先生委員一同の盡力を以て、意外の好成績を得。無事閉會したるは、西洋畫科一同

の深く欣ぶ處なり。

この記事によれば教官、在校生のみならず卒業生も応援出品したことがわかる。同誌第二卷第九号には同年七月七日、収益三五二円七〇錢を献納したことが記されている。

② 白井雨山帰国

明治三十七年二月二十六日、白井雨山が帰国した。雨山はパリに滞在し、また、イタリア、ドイツ、ベルギー、ロンドン等へも旅行し、彫刻の技法や教育方法を研究した。パリではカルチェ・ラタンのホテル、スーフローに中村不折、和田英作、下田次郎らと同宿していた(下田次郎「旧友白井雨山君を憶ふ」『雨山先生遺作集』昭和四年)。

留学中の雨山の消息は『東京美術学校校友会月報』第一卷第二号、第十号の通信欄に一部分が掲載されており、『美術新報』などにも多少の記事が載っているが、詳細は不明である。ただ、『美術新報』第一卷第六号(明治三十五年六月五日)に「白井保次郎氏は目下アンジャルペー氏のアトリエに通学なし居る由」という注目すべき記事があり、これは同誌第一卷第十三号(同年九月二十日)所載久米桂一郎著「仏国現代の美術」に「十七世紀に於けるヴェルサイユ技法の潤潤豪華なる裝飾構図の意を採らんとするもの」として掲げられているアンジャルペール(Unalbert)に雨山が師事したことを示している。また、同誌第三卷第十四、十五号(明治三十七年十月五、十日)には東京彫工会に於ける雨山の帰国講演の記事が載っており、その中で雨山はヨーロッパに於ける彫刻の需用の盛んなことや奨励法が